

第2回 薬学部教員 FD ワークショップ 2020 「より良い授業の実践に向けて」実施報告

朴 炫宣・黒川 優
浦嶋 庸子・江崎 誠治
青江 麻衣・西中 徹
富田 晃司

要旨：大学設置基準改正における FD (Faculty Development) の義務化に伴い、本学でもその重要性について認識し、教育活動の改善や整備に取り組んできた。薬学部では、2019 年に初めて薬学部独自の教員 FD を開催した。今回、教育技法を中心として現状に対する教員間の情報共有を目的に第2回目の FD ワークショップを実施した。

はじめに

本学では、1995 年度に自己点検評価委員会が設置され、自己点検評価の一環として FD 活動を実施してきた。大学における FD 活動の重要性が増し、2006 年度からは隔年毎に FD 報告書を刊行しており、現在、本学で行われている FD 活動としては「教員による授業評価」、「学生による授業評価」、また 2019 年度より始まった「授業公開・参観制度」などがある。6 年制薬学部においては「臨床に関わる実践的な能力を培うこと」を主たる目的として求められているため、各分野の教員間のアウトカムの意識の共有は特に重要であると考ええる。

平成 27 年度文部科学省委託調査の「大学教員の教育活動・教育能力の評価の在り方に関する調査研究」によると大学教員として身につけるべき能力には、

- ・専門分野における知識・能力 (64.2%)
- ・演習・実習で学生を指導する能力 (40.6%)
- ・講義でわかりやすく知識を伝達する能力 (23.1%)
- ・授業を設計する能力 (27.0%)
- ・成績を適切に評価する能力 (33.1%)

などが挙げられている。括弧の中のパーセンテージは、各項目に対して「実際どれほど身につけていると思うか」の質問に対する教員自身の評価である。傾向として専門分野に対する知識や実験・実習に関しては評価しているものの、講義に関する項目では、教員自身も悩んでいる様子が

(22)

うかがえる。今回実施した FD「より良い授業の実践に向けて」は、同じ分野の教員だけではなく、分野横断的に教育の技法・成果について共有することで、各学年の特徴を考慮した 6 年間を通しての教育について考えるきっかけの提供を目的とした。

1. FD ワークショップ実施方法

2020 年 3 月 11 日、第 2 回薬学部教員 FD ワークショップ (WS) を、「より良い授業の実践に向けて」とのタイトルで開催し、薬学部の講義を担当している 37 名の教員が参加した。

今回の FD では、現在実践している授業の現状などについて Microsoft Forms 上で 7 つのセッション、全 32 項目について事前アンケートを行った。

WS 当日は、最初に今回の FD「より良い授業の実践に向けて」の趣旨について西中教務委員長が説明を行ったのち、参加教員の主担当科目の学年を基準に 1～4 年担当の 6 グループに分かれてワークを行った。ワークのアウトプットとして発表資料を作成し、教員全体で結果を共有した。また、WS 終了後、Microsoft Forms 上でふりかえりアンケートを行った。

表 1 FD ワークショップの概要

事前アンケート	実践している授業の現状などについて
ワーク (2 時間 30 分)	・ 主な担当科目、学年に適した授業についてディスカッション ・ ワークの結果発表
ふりかえり	ワークの収穫などについて

1.1 事前アンケートの質問項目及び内容

表 2 に示したように、「教育に関する取り組みについて」、「授業運営について」、「授業資料について」、「課題について」、「試験について」、「学生との関わり方について」、「薬学部の教員として」の 7 つの分野について、計 32 の質問内容からなる事前アンケートを行った。

表 2 FD 事前アンケートの質問セッションと項目

質問分野	質問内容
教育に関する取り組みについて	1. 良い授業を実践するために取り組んでいることを教えてください。その他に具体的な内容をご記入ください
	2. 授業スキル向上のために、勉強会、ワークショップなどに参加したことはありますか？参加したことがあれば具体的な名称・回数などをその他の欄にご記入ください
	3. 上記質問について感想を教えてください。その他の場合は具体的な内容をご記入ください
	4. 自分の授業方法を他教員と共有していますか？その他の場合は具体的な内容をご記入ください
	5. 今回の FD のワークグループの担当科目についてお聞きます。1 コマの授業で割っている時間はどの程度ですか
	6. 今回の FD のワークグループの担当科目は受け持って何年になりますか
	7. 講義関連業務において一番負担に思うものを教えてください

授業運営について	8. 主にどのレベルの学生を対象として講義を行っていますか
	9. その理由を教えてください
	10. 授業に取り入れているものを教えてください。アクティブラーニングについてはその他の欄に具体的な内容を教えてください
	11. 上記の方法で最も効果的だと思うものを教えてください
授業資料について	12. 授業資料を作る際に最も重要視していることは何ですか？その他の場合は具体的な内容を教えてください
	13. 上記質問のための工夫は何ですか？その他の場合は具体的な内容を教えてください
	14. 授業資料のアップデートの頻度について教えてください
課題(レポート、反転授業資料)について	15. 課題について選択肢に当てはまるものをお選びください
	16. 課題を課している場合、確認方法は以下の選択肢のどれですか。その他の場合は具体的な内容を教えてください
	17. 課題の用途は何ですか？その他の場合は具体的な内容を教えてください
	18. 提出させた課題の場合、学生に返していますか？その他の場合は具体的な内容を教えてください
試験について	19. 定期試験の形態について教えてください。組み合わせ及びその他の場合は具体的な内容をご記入ください
	20. 定期試験問題は回収しますか？配布しますか
	21. その理由を教えてください
	22. 定期試験問題のアップデートの割合はどの程度ですか
	23. 試験問題の出題に対する工夫やポリシーを教えてください
学生との関わり方について	24. 学生による授業評価の値をどの程度気にしていますか
	25. 学生による授業評価の結果から授業に反映していることを教えてください
	26. 今回の FD ワークグループの担当学年の学生のうち何割の名前を憶えていますか？(アドバイザー 担当学生を除く)
	27. 学生の名前の憶え方を教えてください
	28. 学生への質問対応についてお答えください。その他の場合は事例など具体的な内容を教えてください
	29. 学生からの質問をどのように授業に反映していますか
薬学部の教員として	30. 学生が求める良い授業とはどのような授業ですか
	31. 上記の質問に対してどのように学生の満足度を上げていますか
	32. 大阪大谷大学薬学部の教員としてのやりがいとはどのようなものですか

1.2 ワーク

教員の主な担当科目の配当学年を基準に、1年担当グループ：6名、2年担当グループ①：6名、2年担当グループ②：5名、3年担当グループ①：5名、3年担当グループ②：6名、4年担当グループ：5名の6つのグループに分かれてグループワークを行った。各グループには、事前に進行役、発表資料作成担当及び発表者を決めてディスカッションが円滑に進むようにした。

グループワークは、教員1人あたり10分程度で各自の授業について紹介（授業資料、授業運営、課題、試験について）をしたのち、事前に配布した以下の項目に対するフォーマットを用い

(24)

て全体向けの発表資料として **power point** を作成できるようにした。

- ・授業コンセプト
- ・授業運営方式（アクティブラーニングなど）
- ・授業資料作成の注意点
- ・試験（適切な成績評価のために）
- ・学生へのサポート（授業及び質問対応など）

これらの項目についてディスカッションし、その内容を「主な担当学年の特徴を考慮した授業デザイン」のワークの結果として発表資料を作成し、各学年の発表担当者により全体発表が行われた。

1.3 ふりかえり

ワークの結果発表の後、1) **WS** の収穫、2) 今後の教育活動に盛り込みたいこと、3) **WS** のテーマの可否、4) 今後の **WS** テーマのリクエストについて自由記述を含めたアンケートを行った。

2. 結 果

2.1 事前アンケート結果

表2の事前アンケートの主な回答内容を抜粋して報告する。1) 教育に関する取り組みについての質問1の回答として教材開発（55.6%）、他教員の授業などの授業見学（21.3%）などが多数意見として回答があった。質問5では、1コマの授業に用いる資料の作成には、3時間から6時間（44.5%）割いている教員が最も多く、また授業で行う小テストやレポートの評価にも1時間から3時間（40.5%）かけている。質問7の講義関連で一番負担に思う項目として講義資料作成（50.0%）、レポートの添削及び小テストの採点（26.3%）であり、授業1コマに対して教材の準備及び事後処理に平均6時間を割いていることがわかった。3) 授業資料についての質問12では、図などによる情報伝達の容易化を最も重要視され（51.6%）、次に箇条書きによる情報の簡略化（22.2%）などに工夫されていることが挙げられた。4) 課題については、67.5%の教員が復習や理解度の向上を目的にレポートを含む課題を課している。5) 試験については、試験形式としてはマークシート（20.8%）、記述式（26.3%）、複合方式の組み合わせ（15.2%）など多様であり、試験問題については55.2%の科目で試験後問題用紙を配布し復習に役立てるように配慮していることがわかった。6) 学生との関わり方の質問24の学生による授業評価については「まあまあ気にする」との回答が60.5%と最も多く、「かなり気にする」と「少し気にする」の回答が15.8%であった。質問25の学生による授業評価の結果から授業に反映していることは何かに対する回答では、配布資料などの改善が21.0%と最も多かったが、参考にならないという答えも複数あったことから学生アンケートに対するフィードバックの意識向上が必要と

考えられる。

2.2 ワークの結果の共有

学年の各グループに分かれてディスカッション、発表資料を作成したのち、再び FD 参加教員が集まり、各学年 10 分程度でワークの結果を共有するため発表会を行った。詳しい内容は表 3 に示したが、1) 1 年生は、勉学の面のみならず大学生活をスムーズに適應できるように生活習慣面でのサポートも大事である、2) 2 年生は、本格的に専門科目を勉強する学年として、勉強の仕方をしっかり身につけられるようにする、3) 3 年生は、基礎から応用への橋渡しの学年

表 3 各学年の授業デザインについて

	1 年の特徴を考慮した授業デザイン
コンセプト	・高校までで学んだ基礎科目（物・化・生）を理解、応用し、大学の内容へと繋げる。 ・教科書を読み、自力で勉強できるように
授業運営方式	・授業内容をまとめさせる（予習・復習課題）。
授業資料	図表、構造式（反応式）。箇条書き。色わけ、穴埋め。まとめ。
試験	採点基準の明確化。
学生へのサポート	顔と名前の一致。質問にやさしく対応。
	2-① 2 年の特徴を考慮した授業デザイン
コンセプト	応用につながる基礎知識を学ぶ。
授業運営方式	講義の合間に問題を考えさせる時間を挟む。穴埋めなど学生に作業させる。
授業資料	計算用メモ欄や、穴埋めのように学生が能動的に作業する機会を設ける。
試験	国家試験を意識しながら、知識だけでなく、理解力を問う問題を出题。
学生へのサポート	学生のモチベーションを上げる工夫が大切。
	2-② 2 年の特徴を考慮した授業デザイン
コンセプト	・専門が始まる時期。2 年生になったとたんについていけなくなる学生が多かったが、2019 年度より 1 年生から専門が始まったので、すこし意識がかわるかも？ ・勉強の仕方を身に着けてもらう大事な学年 ・本当の勉強というのを身に着けさせる学年！
授業運営方式	・課題を出して、書いて学ぶ、読ませて学ぶ ・課題のチェック・課題を通じて使える知識、使い方を学んでもらう
授業資料	・書き込む（穴埋め）等、学生が常に活動できるようにする ・書かない人もいる ・書いてないことはメモしてね、ということで手を動かしてもらうことも。
試験	・試験をしたときにどういうところをみるか？ 国家試験ベース（まる覚えの学生もいる、基礎がわかっていない部分もある）・2 年生で「国家試験」を意識しすぎるのどうか？「薬学」を意識した教え方
学生へのサポート	・個別のサポート・できる子はききにきてくれるのでサポートできるが、真にサポートすべき学生はききにこない・勉強の仕方を教える講義・覚えることのみが（テスト）勉強、ではない

	3-① 3 年の特徴を考慮した授業デザイン
コンセプト	応用科目を理解させると共に基礎科目の内容を復習させる。 基礎科目から応用科目への繋がり。
授業運営方式	2 年次までに履修した内容を復習させながら、3 年次の内容について伝え、4 年次科目の準備をさせる。
授業資料	レジュメが多い。板書が望ましいが、時間が間に合わない。テキストを読ませることも望ましい。レジュメで全てカバーすべきではない。学生に授業内容をまとめさせる必要がある。 学生のレベルがそれに見合うか。どうせ全ては教えることはできないのでアクティブラーニングを導入。教育評価の主流は学生アンケートに依存するがよいのか？ レジュメが良すぎる程、学生が考えなくなる。まとめすぎた教材は良くない。
試験	マークシート、記述式は教科による。国家試験、CBT に繋げる試験を念頭においたものが必要
学生へのサポート	試験のフィードバックができればよい。個別対応が望ましいが難しいので試験後の解説講義を行う。再試験の試験時間を減らし、解説を行う。
	3-② 3 年の特徴を考慮した授業デザイン
コンセプト	基礎から応用への橋渡し 科目間での密な連携
授業運営方式	興味を持たせるための工夫 毎回の小テスト
授業資料	オリジナルの図を使用 動画が有効 教科書の有効利用
試験	図を描かせる 記述式は必要
学生へのサポート	中だるみの時期
	4 年の特徴を考慮した授業デザイン
コンセプト	基礎と臨床の共有（多角的知識の習得）。国家試験への意識付けの再確認。
授業運営方式	知識の習得意欲を高められることを目的とする
授業資料	・互いに基礎、臨床を意識した資料作成。・多様な工夫（色分けにより、構造式の違いを分かりやすくする。普段目に触れるものを問題形式に組み込んだ資料。など）。課題点：書くことを習慣づけようと工夫しても、写メールを撮るだけでうまくいかない。
試験	国家試験で求められている読解力を確認できるような試験問題の作成。
学生へのサポート	・随時質問対応。・ノート作成の補助。

であり、科目間での密な連携が必要な学年でありながらも、中だるみの時期でもあることから、4 年次の CBT に向けて気を引き締めるようにサポートする必要がある、4) 4 年生の後半に行われる CBT 及び OSCE の共用試験、また 5 年次の実務実習に向けた基礎と臨床の多角的知識の習得が必須であり、国家試験への意識付けの再確認が必要である、など各学年の特徴を考慮した学習及び生活面でのサポート案について情報共有することができた。

2.3 ふりかえり

図 1 及び 2 において 1) WS の収穫、2) 今後の教育活動に盛り込みたいことの共起ネットワ

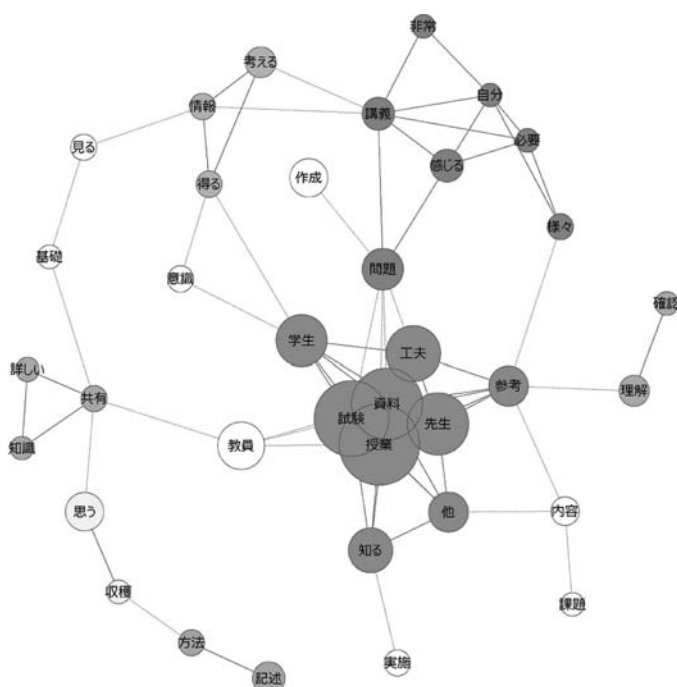


図1 今回のWSの収穫（総抽出語数：2722、異なり語：501）
他の教員の、授業、資料、試験、工夫に関して収穫があった

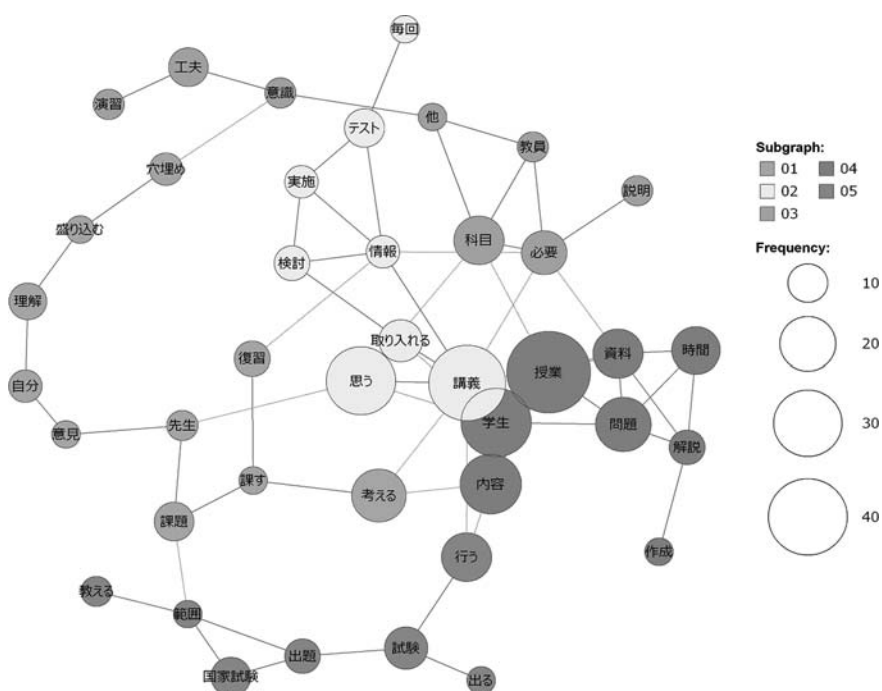


図2 今回のWSを通じて教育活動に盛り込みたいこと（総抽出語数：3467、異なり語：706）

(28)

ークとコンコーダンス解析の結果を示した。3) WS のテーマの可否については、29 人が適切であると評価した。(図 3)

また、WS のテーマについての自由記述として

- ・他の教員の授業に関するスタンスをダイジェストで聞けて良かった。教員が授業参観に行くのも効果的だが、それ以上の成果が短時間で体感できたように思う。
 - ・他の教員の工夫などを知ることができ、自分の資料や授業方法についても再考すべき点がいくつかあった。
 - ・これまで授業の内容に関して他の教員と話し合いをすることはあっても、やり方に関して情報共有や話し合いができてよかった。
 - ・他の教員の取り組みやアイデアを伺うことができ、あらためて自らの課題も認識できた。
 - ・大学教員が常に目指すべき方向性として正しい問題設定である。
 - ・授業参観とほぼ同様の効果があると思われ、非常に参考になった。
- など、情報共有の機会として概ね肯定的な意見であった。

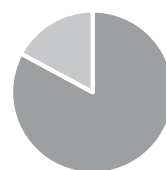
また、4) 今後の WS で取り上げて欲しいテーマのリクエストとしては、以下のようなものがあった。

- ・大教室用のアクティブラーニングの方法
- ・国試対策の方法
- ・低学力者に対する教育の方策（対象学生を絞った取り組み）
- ・学習する能力の質の向上方法
- ・反転授業の方法
- ・学習の習慣をつけさせる方法

今回の WS を通じて、薬学部 6 年制における各学年で必要である特徴を把握し、さらに現状を踏まえた上で今後必要となる教育技法や特に低学力者に対する支援方法についての希望が多かった。

3. 考 察

今回の FD は、2019 年の第 104 回薬剤師国家試験の結果において本学の結果が思わしくなかったことを受け、現状を薬学部教員の全体で再認識し共有することを目的に行われた第 1 回薬学部教員 FD ワークショップからおおよそ 1 年経過してからの開催である。第 105 回薬剤師国家試験の結果は、前年に比べ立て直してはいるものの、今後の見通しが必ずしも明るいわけではない。こういったことから、まずできることとして薬学部教員全体が現状を把握し、情報を共有することは肝要である。教員の授業スキルアップを図ることで、学生へも教員の意気込みが伝わ



■ 適切である29人
■ どちらともいえない6人

図 3 今回のテーマの可否

り、薬学部全体の意識改革も含めた教育体制の確立に役たつよう今後も模索していきたい。

参考文献

- (1) 尾崎恵一、「大阪薬科大学における FD 活動の新しい取り組み」、薬学教育、第2巻、2018-004 (2018)
- (2) 小佐野博史、「薬学部に求められる FD 活動」、薬学教育、第2巻、2018-021 (2018)
- (3) 株式会社 リベルタス・コンサルティング、「大学教員の教育活動・教育能力の評価の在り方に関する調査研究」、平成27年度文部科学省委託調査 (2016)
- (4) 田中京子、「KH Coder と R を用いたネットワーク分析」久留米大学コンピュータジャーナル (2014)
- (5) 江崎誠治、青江麻衣、初田泰敏、西中徹、富田晃司、「2019年度第1回薬学部教員 FD ワークショップ「薬学部の将来に向けて」実施報告」、大阪大谷大学紀要、54、111-119 (2019)